みそ萩

美知代

山本さんも瀧澤さんも、最も皆なそれ〴〵、御歸校のお準備においそがしくつて被在ることだらう。此間お目に掛つた時、お二人とも今年は少しく早め

に、九月の月に入つたら、直ぐにも發ち度いやうな事を仰有つて居た——

斯樣思ふと千枝子は堪らずなつて、縫ひかけて居たお裁縫もなにも、うつちやつて仕舞ひ、フト庭下駄をつゝかけたまゝ、裏庭へ駈け出しました。

『あゝあゝ行き度い、行き度い！』

狂人のやうな身振りをした千枝子は、兩方の手を胸に押し當てゝ、さも〳〵なやましいと云つた有樣もえるやうな其眼には涙が一杯みなぎつて、今にもほてつた其頰を傳つて流れ落ちやうとして居ます。

『あゝあゝ行き度い、行き度い！』

又しても斯樣叫ばないでは居られません、千枝子の胸は今、悲しい、口惜しい、羨しい、種々の情念に亂れ亂れて、居ても立つても、立つても居ても居られぬ程、あゝあいつそのこと、其處いらぢう引かきむしつて、而して引ちぎつて仕舞ひ度い、いゝえ、それ處か、所詮學校にも行かれないで、此儘斯樣した草深い片田舎に、埋れ果てゝ仕舞はなければならん運命と、定つて居るのなら、死んでしまつた方がどんなにか增しだとさへ思はれるので。

『いつそ母樣に今一度、思ひ切つてお願ひして見ようかしら……』

千枝子は斯樣も思つて見るのでしたが、直ぐに又

『如何してそんな事がお願ひ出來るものぢやない！』とわれと打ち消して、

『あゝあ父樣さへ生きて居て下すつたら！』

とせぐり上げる涙を押し拭ひ押し拭するのでした。

實に父樣さへ生きて居て下されば、一家何心配もなく、平和に幸福に、千枝子は苦い涙一滴流す事もなく、某女學校の秀才として、先生方から愛せられ友達から尊敬されて、樂しい學校生活を續け得られたのでせうに地方でてそあれ、辯護士として可成り評判も好い方であつた父樣が、此の夏突然腦病でおなくなりなすつたゝめ、別に遺產もなく、その上、辯護士なんぞ斯樣した派出な生活にはえて有り勝ちな負債さへ殘されたので、家財の自屋しいものは皆

な差押へられ、母樣は千枝子を相手に夜晝となく人仕事をして、老人と澤山な兒達を養つてらつしやる。

さうしたなかで、如何に青雲の氣おさへ兼ぬればとて、如何して千枝子は呑氣と遊學沙汰を申し出られませうか、勿論千枝子は學資の澤山に掛る、これ迄學んで居た某女學校へ歸り度いと思ふのではありません、千枝子はそつと友達から借りて來て、師範學校の入學試驗問答を讀んで見ました處、案外やさしく、思つて居た程難かしくもなささうなので、試驗をうけて師範學校に入り、官費でも好いから勉强し度いと思ふのでした。

而してそれも、一生小學校の教師で了る氣ではなく親あり弟妹も多い身は、如何したつてそれ丈けの俸給では、中々家庭らしい家庭を作り、弟妹を教育してそれ〳〵にしたてゝ行くわけには行かず、母樣に御安心おさせ申す事も出來まい、けれ共師範學校を卒業して成績がよければ、直ぐ又官費で高等師範に進む事が出來ると云ふ、よし又不幸に

して此の選にもれたとしても、師範學校卒業後、その義務年限をつとめて居る間にうんと勉強して、やがて高師の試驗をうけ、首尾よく卒業したなら、卒業さへしたなら、彼の津田先生のやうに、女でこそあれ、立派に生活して行かれる、津田先生は高等師範の御出身、而して某女學校の教頭、阿母樣がおありなすつた、お妹御さんは美しいお召物をめして、いつも學校へお通ひなすつた、私は、私は、弟は一人だけれ共、妹は澤山だから、さう一人一人立派にばかりさせてはやられまい、先づ弟丈けは中學から高等學校大學と順を追ふて進ませるとして、妹達は皆な私と同じに官費で教育して頂く事にしよう。

あゝ左樣なつたらどんなに幸福だらう？　母樣にはいつもおやわらか物ばかりお着せ申して、私は教育者だからつゝしむとしても、母樣は非常にお好きなのだから、芝居も變りめ變りめには是非おみせ申さうまあどんなにか、お喜びなさるだらう、だが最うその頃には、老母樣はおなくなりなすつたらつしやるだらう、老母樣も不幸福な方、せめていきて被在るうちに、幾らかでも安心して頂くやうにし度いものだ、ナーニ高等師範さへ卒業すれば——

千枝子はそれからそれへと、一人樂しい空想に思ひふけるのでありましたが、

『千枝子、お前何時まで其處にぼんやり突立つてるんですね。妙な兒だねえ。』

と、つい耳元で聲かけられて、振返つて見ると、母樣が溝萩の美しう咲き亂れたのを手にして立つて被在るのでした。

『アラ母樣！』

今の今迄考へて居た事を見透されはしなかつたかしら、餘りと云へばわれながら愚かしい程空想的であつた。さうするには第一、如何に官費だからと云つても、月々幾らかづゝの小使錢は自辨しなければならぬ、如何してそれが今の境遇で出來ようか、千枝子は悲しい心を押しかくして、

『まあ母樣隨分美しう咲いたわねえ、父樣にお供へ

するとようございますわ。』

『おゝ、そのつもりで切つて來たんだがね、お前何處か惡いんぢやないかい、何だか顏色がよくないやうだよ。』

『いゝえ、どうもないわ。』

『なら好いけ共ね、用心してお呉れよ、お前一人が頼りなんだから——』

『え。』

[redacted]